

# 文学の杜

仙台文学館  
友の会会報

第37号

平成23年12月10日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022(271)3020

仙台文学館のホームページ

<http://www.sendai-il.jp/>

## 「ほめられた絵」が出発点

晩翠忌記念  
イベント 絵本作家とよたかずひこ氏講演

仙台市出身の詩人土井晩翠の命日(10月19日)の前後には例年、晩翠忌記念行事が催される。10月16日、晩翠わかば賞あおば賞贈呈式に引き続き、とよたかずひこさんの講演会が開催された。



とよたかずひこ講演会

晩翠わかば賞あおば賞選考委員の、とよたかずひこさんは仙台出身の絵本作家である。ご自分のお子さんに自作の絵本を読んであげたいと思ったことが、絵本作りのきっかけになったとのことである。冒頭、とよたさんは、写生の時間に県

庁を描いた自分の絵が、思いがけず県の美術展で県知事賞をもらったという、小学四年生の時のお話をされた。

美術系の学校を出たわけではないのにイラストレーターの仕事に就き、その後絵本作家になり、ずっと絵の仕事をしているのは、やはり四年生の時の、あの「ほめられた絵」の経験が基になっているのだと思うとのこと。それは晩翠わかば賞あおば賞受賞者へのうれしい励ましのことばでもあった。

日ごろ「おっちゃん、あそぼ！」と、近所のこどもたちが誘いに来ると、とよたさんは彼らと一緒に遊ぶそうだ。「日常の中から絵本は生まれ、日常生活のある部分が、絵本に活かされていく」

### 第52回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・福士湧太さん

(青森県田子町)

晩翠あおば賞・岡崎史歩さん(仙台市)

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第52回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月16日、仙台文学館で行われた。

晩翠わかば賞は、青森県田子町立清水頭小学校5年福士湧太さんの「跳び箱」。

という氏の考えが、びたりと胸にはまる。大切な日々なのである。

『でんしゃにのって』『とうふさんがね』『どんどこももんちゃん』『ももんちゃんぎゅっ！』など、ご自身の作品の読み聞かせを参加者みんなでたのしむ。

とよたさんの絵本は、温かでやわらかいユーモアに包まれている。そしてあかちゃんも、こどもも、動物も、くだものも、お豆腐さえも、みんなしっかりと自立している。意志を持っている。自己判断する力を備えている。そこがよい。

次の世代にどう生きるかを伝えることが、大人の大事なしごとだと、普通の声で、普通の表情で、とよたさんは言い切る。

このほかの晩翠忌の記念行事としては、詩人の武田こうじさんによる「詩の文学館」晩翠を読む(10月15日)があり、命日には恒例の「杜の都にひびけ」荒城の月市民大合唱が仙台城跡にある荒城の月詩碑前で行われた。(佐)

晩翠あおば賞は、仙台市立仙台高等学校1年岡崎史歩さんの「うめぼし」に決まった。応募作品は東北地方と仙台市内姉妹都市である大分県竹田市の小・中学生から、総数680編。ほかに優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、青森県五戸町赤坂翔太さん、青森県八戸市宮崎祐希さん、宮城県美里町ささきひろとさん。晩翠あおば賞優秀賞は、岩手県奥州市松本彩花さん、仙台市星祐貴子さん、岩手県奥州市高橋哲朗さん。

## 文友一滴

お相撲さんが大関や横綱に昇進すると、伝達式で紋付袴の本人が口上を述べる場面がある。いつも決意を表明する言葉が話題になる。今回大関昇進の琴奨菊は「万理一空」だった。彼がわが相撲人生に込める思いを、どのようにして選んだのだろうか。

過日数人の席で、ある四字熟語の話題が出た。思わず「ああ、あれはそう読むのですか」と大声で言ってしまったから、後悔した。以前その熟語を見た時に、一文字だけなんと読むのだろうと思ったのだが、字面から情景が浮かぶものだったので、分かったような気になり、調べなかったのである。

四字熟語はたくさんある。文字を見ただけで読みも意味もすぐにわかるもの、つまりごく一般的に使われているものには、たとえば「半信半疑」「直立不動」「八方美人」「本末転倒」「前代未聞」「白砂青松」などがある。一方、読みも意味も説明を要するようなものもある。「韜光晦迹(とうこうかいせき)」「銘肌鏤骨(めいいきりこつ)」「只管打座(しかんたざ)」など、頭を抱える。「乾坤一擲(けんこんいつてき)」「毀譽褒貶(きよほうへん)」はよく使われるが、初めて出合ったら読めない。書くことは更にできない。熟語辞典をながめていると時間を忘れる。(佐)

1月21日から 特別展「文学と格差社会」

樋口一葉から中上健次まで  
近代文学の100年を俯瞰

日本の近代文学史を紐解くと、「貧困」や社会の底辺に生きる人々を描いた作品が数多く残されています。1月21日(土)から開催する特別展「文学と格差社会」樋口一葉から中上健次まで」では、こうした作品とそれらを描いた作家たちを取り上げ、近代文学の百年を「格差社会」という視点で俯瞰しながら、現代日本が抱える歪みをもとらえ返していきます。明治の苦界に生きる女性たちを描いた樋口一葉、自らも貧困にあえぐ中で社会の矛盾を見つめた石川啄木、そのほか幸徳秋水、大杉栄など社会思想に生きた作家や、小林多喜二、中野重治などのプロレタリア作家、自らの出自を描くことでそのルーツに向き合い続けた中上健次など、社会とそこに生きる人々を様々な角度から描いた作家たちを、貴重な資料で紹介いたします。また、真山青果、前田河広一郎、ぬやまひろしなど、矛盾を抱える社会の現実とそこに生きる庶民の姿を描いた宮城ゆかりの作家と作品も紹介します。

会期中は文芸評論家の川村湊氏と作家の佐伯一麦氏の対談など、関連イベントも開催します。東日本大震災の後、現代

友の会随想

『飢えて死ぬ子供を前に文学は無力である』(サルトル)『戦争を前にして文学は無力である。だが、そう思うのなら文学などやめてしまったほうがいい』(小林秀雄) 文言は正確ではないが何かの本で読んだ記憶がある。



大震災を前にして誰しもが言葉を探し、宮沢賢治や金子みすゞの詩が凍り付いた心に、かろうじてぬくもりの灯を点してくれた。今回ほど言葉の力が問われたことはない。詩を書くことを趣味にしている私も、あの惨状の前に、脚が震えて言葉がなかった。1篇の詩など何の意味もないとさえ思った。1か月ほどして、赤いランドセルを新聞で見

小林多喜二  
「蟹工船」原稿

社会の抱えるひずみが浮き彫りになる。今、社会と文学がどのように向き合ってきたかを改めて問う企画として、多くの方に会場にいらしたいと願っています。(学芸室長 赤間亜生)



初めて一つの詩ができた。あの中には子供や家族の未来や夢や希望や期待があふれるほど詰まっていたのだらうと思うと胸が熱くなった。

「ひとくちに(がれき)といつてしまえば/それだけのこともかもしれない/だが(がれき)なんてひとつもない/かぞくが

3・11追悼詩集『沈黙の海』

友の会会員 菊田 郁朗

を見て、身を切られるようだった、と。かつて勤務した気仙沼、南三陸町志津川、石巻で亡くなった人、被災された方の心痛に想いを馳せながら、また依然として降り注いでいる原発への不安と警鐘を込めて、32篇を手作り詩集としてまとめた。それを、内館牧子さんに差し上げたところ、早速、読売新聞全国紙に掲載(9/25)していた

長い時間をかけて/こつこつと積み上げてきた/思い出の詰まったものばかり...」と詠んだ時、多くの被災者から、声が寄せられた。ボランティアの方に片付けてもらうことはとてもありがたかったが、スコップで次々に処理されていくの

聞全国紙に掲載(9/25)していた  
だき、350を越える注文が来て驚いた。被災された方からも多くの手紙をいただいたのだが、心の中はあの日から何も変わってはいない、と思った。一冊から300円のみやぎ震災遺児基金が20万円を超えた。この小詩集を通じて、微力ながら震災遺児への支援活動を継続していこうと思っている。

主な展示資料

樋口一葉「にぎりえ」草稿、石川啄木「呼子と口笛」原稿、大杉栄書簡(幸徳駒太郎宛)、小林多喜二「蟹工船」原稿、徳永直「妻よねむれ」原稿、中上健次「岬」原稿、前田河広一郎「三頭先客」原稿、久板栄二郎『北東の風・断層』、佐左木俊郎「黒い地帯」原稿、雑誌『東北文陣』など

会期中開催予定のイベント

1. 文学講座「東北とプロレタリア文学」  
高橋秀晴(秋田県立大学教授)

2. 対談「文学は社会をどう描いてきたか」川村湊(文芸評論家)×佐伯一麦(作家) 2月12日(日)
3. 文学講座「小林多喜二『蟹工船』と世界」島村輝(フェリス女学院大学教授) 2月26日(日)
4. リーディング(樋口一葉「にぎりえ」を読む)渡辺祥子(フリーアナウンサー・朗読家) 1月21日(土)
5. リーディング(石川啄木「呼子と口笛」を読む)館林敦士(俳優) 2月18日(土)

1月29日(日)



文学館  
ゼミナール

井上ひさし作品を読む

戯曲『父と暮せば』など

仙台文学館の初代館長として活躍した作家の井上ひさしが昨年4月9日に亡くなって1年8カ月。没後盛んだった戯曲の追悼公演などが東日本大震災によって途切れた。しかし、被災後の落ち着きを取り戻した8月26日、仙台・電力ホールで「父と暮せば」のこまつ座公演があった。次いで文学館ゼミナールの「井上ひさし作品を読む」講師・今村忠純大妻女子大教授が9月17日に開講、「父と暮せば」を手始めに1回のペースで4回の講座が持たれた。

劇作家、小説家としての井上ひさしに対する評価や研究は没後のこれから本格化するだろう。特に仙台の私たちは東北に縁の深いこの作家を忘れることなく、作品を味わい、研究していきたいものだ。そういう意味で、こまつ座公演もゼミナールもタイミングが良かった。しかも公演前の8月17日には、文学館友の会の新企画である読書会が開かれ、1回目は「父と暮せば」が取り上げられた。

友の会会員で詩人の吉田秀三さんが、詩論総合誌「詩と思想」10月号の特集「東日本大震災―悲しみをこえて―」に、宮城県内の震災状況と詩人たちの創作活動についてコラムを発表した。

吉田秀三さんが  
震災文学コラム

劇作、小説、評論など井上ひさしの残した作家活動は膨大なものである。どこから研究を始めたらいかが戸惑うが、今村教授は「父と暮せば」「四十一番の少年」「東京ゼンローズ」の3作品を取り上げた。「父と暮せば」は核や被爆の問題に対するこの作家の取り組みやスタンスが良く分かる作品。「四十一番」は自伝的な要素が濃い。これらの作品は井上ひさしの思想や生き方を知る上で重要であり、実体験や歴史を踏まえてどう作品化するかという手法も浮かがる。

井上ひさしは仙台文学館の館長を約10年間務めたから、私たち仙台市民に馴染みが深い。一昨年3月から7月にかけて仙台文学館の開館10周年記念事業として「井上ひさし展」が開かれ、作品「吉里吉里人」の世界に親しんだ。文学館友の会の総会時には井上ひさしと会員との懇談会も持たれた。友の会との交流は、平成14年12月の茶話会、16年2月と17年7月の会員限定講演会などもあった。友の会の文学散歩（施設見学会）は第1回が山形県川西町の「遼筆堂文庫」だった。21年7月には山形市の「シベールアリーナ」遼筆堂文庫山形館も訪れている。



今村忠純教授のゼミナール（10月29日）

タイトルは「ひかりある言葉へ向かって―絶望から希望への道―」。吉田さんの詩友はじめ、小説家、歌人、俳人の震災関連作品を紹介しながら自らの詩にも言及する内容。震災の惨状に向き合い、そこから立ち上がろうとする動きが俯瞰でき、県内の文学活動ぶりも分かる。作品の一部を引用して詩歌や文章の核心が

編集後記

▽会員の境数樹さんが代表を務める「みやぎ聞き書き村草子舎」は、草子第11集として「東日本大震災特集」を出版しました。気仙沼、南三陸、七ヶ浜、名取、岩沼、亘理など宮城県内各地の被災者から震災体験を聞き出している。津波からの必死の避難や救助のありさまが生々しく伝わってくる貴重な記録集です。

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第37号をお届けします。

恒例の年賀状展

本年度も、文学館主催、友の会共催事業「新春ロビー展100万人の年賀状展」を開催します。今年で第10回を迎える恒例の企画となりました。好きな作家や作品名、作品の一節、自作の詩や俳句、また自由なイラストなどを添えた年賀状作品を募集し、館内でご紹介いたします。

多くの会員みなさんに、年賀状作品をお寄せいただき、ご参加いただきますようお願いいたします。

紹介されており、震災と文学に関する充実したりポートになっている。乾いた情報とは異なる、内容の濃いコラムだ。（友）

◆ 会員情報コーナー ◆

▽会員の井上康さんは「亜礼母禮通信第二号」「鬚蜚（浮遊編）」を発行しました。

▽本を読んで他の人と語るのは楽しい。こんな習慣を持つようになったのは定年になってからだ。いや、病気になる前からかもしれない。定年と同時に病気がしたからどつちだか分からないのだ。それはさて置き、その延長線上にあるのが読書会なのだ。時間の過ごし方としては少数派のようだ。友人知人にそのことを言うと、奇異な目で見られる。そうでなくなればいいんだが、と勝手に思っている。（宇）

▽年に三回手元に会報が届き、それを読んだ時、会員みなさんはどんな感想を持たれるのでしょうか。こんな欄があったらいいのとか、いつもここが愉しみとか、もつとたのしい会報にならないかとか、ご意見や感想を寄せていただくと参考になります。（佐）